

上演8 2026年7月31日（金）3校目 関東ブロック（千葉県） 千葉県立松戸高等学校 『Happy Days』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 秋田県立秋田中央高等学校 石戸 凜花
--	---

この物語は戦争という題材を通して、「何気ない日常の幸せ」や「自由に表現活動(演劇等)をできる」ことの素晴らしさを私たちに伝えてくれた。

戦争は日本でも忘れてはいけない出来事として語られ続けている。この劇を見て、その歴史の重さを突きつけられ、当時の人たちの苦しみや絶望を同じように感じ取ることができ、改めて私たちはこの悲劇を繰り返してはいけないと思った。

舞台は戦時中の日本。現代を生きる主人公が若き日の祖母に憑依して5人の演劇部の女子高生と、彼女たちが想像した「シェイクスピア」が夢を語りながら演劇に打ち込んでいく物語だ。

「戦争が終わる」という先生の言葉を信じて、これからの将来に夢いっぱい希望を膨らませる姿は観客である私たちにも伝わり一緒にワクワクした気持ちを抱かせた。だからこそ戦争が終わるというのは政府の嘘であり、さらに全ての部活動が強制的に廃部になるという話を先生から聞かされた時の彼女達の表情には絶望の色がにじんでいた。そして彼女たちが下した決断は、自ら解散という形を取ること。誰かに辞めさせられるのではなく、自分たちで活動に終止符を打つというシーンでは、同じ演劇部員として痛いほどその気持ちが分かり、過酷な環境の中でも強く生きようと思う芯の強さに胸を打たれた。

戦後、チヨさんは戦死した部員たちの思いも背負って学校のシンボルでもある木や戦禍を逃れた校舎、さらにあの時、解散を余儀なくされた演劇部も存続できるよう活動を続けた。彼女の手によって蒔かれた愛が確実に芽吹き、チヨさんのハッピーデイズは確実に後世に受け継がれていっていたのだと思う。

また、後方で大きな存在感を放っていた背景の木に、なぜか幹がなかった点について、講評委員の中には、その下に大勢の演劇部員が並ぶことで幹のように見えて、いろいろな人の支えがあって木が育っていることを表現しているのではないかという意見もあった。ラストシーンで写真部の生徒が記念撮影をする際には、チヨさんを囲んで現部員だけではなく、亡くなった仲間たちや空想上のシェイクスピアまでも映りこみ、大きなフレームに笑顔が収まった瞬間、会場は大きな感動に包まれ、涙した人も多くいた。

この物語では「生きること」、「演じること」、「愛すること」という台詞が大事にされており、それが私たちに今を生きる幸せだったり、自由に表現活動出来る素晴らしさを教えてくれたのだと思う。

また、現在の演劇部活動も少子化によってあらゆる地方で廃部の危機に晒されている。だからこそ私たち

も世代を超えて演劇を続け、チヨさんのようにこの演劇のバトンを繋いでいきたい。そして、私たちがこうして好きなことを好きなようにできる今の環境に感謝をしたい。

